

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①目標や課題を明確に提示し、生徒が関心をもって授業に臨み、意欲的に学習できるよう授業改善に努める。②課題に応じてICTを活用し、特別支援の観点から、誰もが理解しやすく意欲をもって取り組める学習環境を工夫する。	①各教室に設置された「今日の目標」というプレートを活用し、学習内容を明確に理解できるようになった。②ICTの活用に関してはネット環境による制限もあるが、その中で情報担当と協力しながら取り組むことができた。	B
豊かな心	①道徳年間計画に関し、主題配列の見直しや、内容項目に沿っての授業に使用できる資料の学校管理などを課題として、充実した教科道徳を進めていく。②Pay Forwardの考え方を定着させ、日常の生活の中やあらゆる教育活動の場面で意識して実践できる生徒を養う。	①年間計画に沿った形で授業に使用できる資料の検討や管理などに取り組み、充実した教科としての道徳を進めた。②Pay Forwardの考え方を定着させるための、人権週間の実施や道徳の授業づくりを行った。	B
健やかな体	①身体計測、新体力テストを実施し、自分の体や体力について知り、自らの健康の保持増進や体力の向上につなげる。②食事、運動、休養の必要性、健康面について、教育活動全体を通じて学習できるように教科、学校保健委員会と連携を図る。	新体力テスト・身体計測を全校一斉に行い、自分の体力や成長について知ることができ、今後の取り組みにつなげることができた。学校保健委員会は、感染症予防のために開催できなかったが、生徒自らが健康課題を検討し保健委員会を中心に取り組み文化祭で発表した。	B
特別活動	①「Pay Forward」と「Greeting-Day」の二本柱を中心に、生徒の自主性の育成と活動の充実を図る。②生徒会本部と各委員会間の連携充実を図り、共同で取り組める活動の充実を図る。	「Pay Forward」は継続的に活動を行ったり、地域へ拡大したりするために、人権担当や太委員会と連携を深めることが今後の課題である。中央委員会では各委員会間で協力して活動ができないか検討・実践するなど、連携が深められてきている。	B
いじめへの対応	①いじめ防止対策委員会で情報を共有し、記録を取り、進捗を管理する。活動を生徒及び保護者に周知する。②いじめ防止の取組や研修を実施し、教職員の資質向上を図る。	いじめの未然防止、早期発見に向けて効果的な取組ができた。生徒の嫌だという気持ちに寄り添い、アンテナを高く張り、いじめ防止対策委員会で方向性を考えることができた。また、いじめと疑われる事案について、毅然とした対応を行うことができた。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①メンターチームを組織し、ミドルリーダーを中心としながら定期的に自主研修を行い、経験の浅い職員の育成を図る。②研究授業、校内研修を計画的に実施しながら、教師力の向上を目指す。③働き方改革の視点から、部活動など生徒の適切な活動時間や職員の無理のない働き方について考える。	メンターチーム研修会を定期的にもち、毎回テーマを決めて自主研修を行った。経験の浅い職員だけでなく、経験者も積極的に参加し、一緒に研修することができた。授業研習週間に設け、相互に授業を参観し授業力の向上に努めた。働き方改革の視点から、部活動や会議など、無理のない計画を立てるよう努めた。	B
児童生徒指導	①コロナ禍で実施できなかった研修について、研修を精選し、内容の充実を図る。②教育相談のアンケートやY-Pアセスメントなどを活用し、相談活動の充実を図る。	昨年度まで行えなかったY-Pアセスメント活用研修を通して、新しい視点や、知識を得ることができた。また、アンケートの回答から、生徒の困り感を引き出すなど、相談活動への活用もできた。	B
特別支援教育	①共有ホルダーへの入力をこまめに行うことを大切に、共通理解を基本にチームで生徒指導を行う。②合理的配慮と基礎的環境整備の充実についての研修を深める。Coを中心にチームで協議し、学校としてできることを考える。	担任だけでなく、学年職員や教科担当、部活動顧問など、全職員で情報共有することができた。アセスメントシートも日々活用することができている。また、研修会では、合理的配慮の必要性や注意点など、新たな視点を得ることができた。	B
地域連携	学校だよりの配布や学校ホームページを活用することで、学校の様子を伝え、地域の理解と信頼を深めていく。また、コロナの状況を踏まえながら、可能な限り中学生が地域社会の一員として主体的に活動できるような活躍の場を整え、推進していく。	学校だよりの配布や学校ホームページを通して、学校の様子を地域に伝えることができた。ふれあいフェスタなど、学業地連の事業を通して、地域の一員である自覚を高めることができた。	B
学校運営協議会	①小中ブロックで運営協議会を持つことで、小中一貫教育の充実を図る。②キャリア教育における職業講話や職業体験受け入れ先の拡充、模擬面接のための面接官の協力を仰ぐ。③地域学校協働本部とともに活動することで、地域人材の発掘を行う。	小中ブロックで運営協議会をもち、時には生徒も参加させることにより、中学生の実態や成長ぶりを見ることができた。キャリア教育における模擬面接の面接官として協力を仰ぎ、生徒にとって有意義な機会となった。地域学校協働本部とともに活動し、地域人材の発掘を行った。	B
ブロック内評価後の気付き	・今年度は、コロナの影響はあるものの予定通り、小中一貫授業研究会や各行事を実施することができた。 ・中学校区の担当者会で、各学校の状況について情報交換をすることができ、ブロック内での一体性をもつことができた。今後より一層交流を綿密に行い9年間で育てる子ども像の実現に向かいたい。		
学校関係者評価	このコロナ禍の中で学校教育が制限される中、先生方の工夫した取組で各項目とも一定の水準が保たれていると思う。ただし自己評価結果について具体性が乏しく、今後の原状回復後の教育活動に期待したい。また地域は中学生のかかわりを深める活動を望んでいる。		

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①目標や課題の提示では、生徒につけさせたい力を明確に提示し、生徒が学習に取り組むように工夫する。②誰もが意欲的に取り組める学習環境をつくるために、情報担当と協力して、ICT活用に取り組む。	①毎回の授業で、課題を明確に提示し、生徒が意欲的に学習できるようにした。②情報担当と協力して、ICTの活用により、教室以外でも学習できるよう環境づくりに努めた。	A
豊かな心	①道徳年間計画は引き続き、見直しを続け特別な教科である道徳をより良い形で授業をできるようにする。②基本的な柱であるPay Forwardの考えを校外にも広げられるようにする。	①道徳年間計画に基づき、授業を行うことができた。授業づくりの参考になるような情報を提供し、無理なく授業ができるよう努めた。②Pay Forwardの考えをベースに人権週間の活動や道徳の授業に取り組むことができた。	A
健やかな体	①身体計測・新体力テストの実践を通して自分の体や体力について知り、自らの健康の保持増進や体力の向上につなげる。②心身の健康の保持増進のために教育活動全体を通じて学習できるよう教科や特別活動との連携を図る。	①身体計測や新体力テストに興味関心を持って取り組み、昨年度の結果と比較個々の目標を実現していくことが出来た。②保健体育科の保健分野の学習において健康の保持増進について自ら考え、よりよい生活と健康について考える時間を持つことが出来た。	A
特別活動	①「Pay Forward」と「Greeting-Day」の二本柱を中心に、生徒の自主性の育成と活動の充実を図る。②生徒会本部と各委員会間の連携充実を図り、共同で取り組める活動の充実を図る。③Pay Forwardの活動を校内および校外に向けて発信するための取り組みを深化させる。	①よりよい中川中学校を目指して、生徒会中心にPF活動の推進や、Greeting-Dayを実施した。②中央委員会と各委員会の垣根を超えた議論を行い、学校生活に反映させた。③他校へのPFの紹介を行い、今後の中川中学校でのPF活動の展望について考える機会を設けた。	A
いじめへの対応	①引き続き、いじめ防止対策委員会で情報を共有し、記録を取り、進捗を管理する。活動を生徒及び保護者に周知する。②いじめ防止や危機管理の研修を実施し、教職員の資質向上を図る。	いじめ防止対策委員会で連携を密にとり、生徒の嫌だという思いを細かくすくい上げていくことができた。いじめの定義の確認や当該、関係生徒への聞き取り、教育相談のポイントなどを、いじめ防止・対策研修や危機管理演習を通して確認し、職員の研鑽も進むことができた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①メンターチーム研修会や授業研修をより充実させ、経験の浅い職員だけでなく職員全体の教師力の向上を目指す。②会議の時間短縮をはじめ、効率よく業務を行えるよう、引き続き工夫する。	今年度も定期的にメンターチーム研修会をもち、経験の浅い職員と経験者がざくばらんにいろいろなテーマについて研修できた。会議の時間については、内容の精選と時間短縮を目指して改善を計画している。	B
児童生徒指導	①教育相談のアンケートなどを活用し、相談活動の充実を図る。②Y-Pアセスメントの実施時期を工夫し、生徒の実態や変容を捉えられるようにする。③生徒指導の研修を実施し、教職員の資質が高められるよう、計画、運営を行う。	今年度は生徒指導研修として、危機管理演習を行い、教職員の資質向上に努めた。隔年で内容を変えながら、充実した研修を行っていき、また、時期や実施方法を工夫してアンケートを行うことで、生徒の実態を把握し、相談活動へ繋げていくことができた。	B
特別支援教育	①共有フォルダーの活用をさらに深く、共通理解を得たうえで、生徒の支援を行う。②個々のニーズに対応できるよう、学年Coが中心となって、支援体制を検討していく。③支援体制の充実を図るため、教職員の研修を計画する。	担任だけでなく、全職員で情報共有をすることができた。アセスメントシートも活用することができている。サポート教室では個々のニーズに対応できるよう、担当の職員が中心となり登校支援や学習支援を行うことができた。研修時のみでなく、共通理解が必要なことに関しては適宜アナウンスする必要がある。	B
地域連携	①引き続き、学校だよりの配布や学校ホームページを通して、学校の様子を伝え、地域の理解と信頼を深めていく。②社会情勢をふまえつつ、生徒が地域社会の一員として主体的に活躍できる場を建設的に調整する。	学校だよりの配布やホームページを通して、学校の様子を地域に伝えることができた。地域の行事への生徒の参加を促し、地域の一員として生徒の活躍の場を広げることができた。オープンスクールでは、コミュニティハウスと連携して、様々な活動に触れる機会を設けた。	B
学校運営協議会	①小中ブロックで運営協議会を持つことで、広く地域とのかわりを持ち地域連携の充実を図る。②キャリア教育における3年模擬面接のための面接官の協力を仰ぐ。③地域学校協働本部とともに活動することで、地域人材の発掘を行う。	小中学校ブロック運営協議会が2年目となり、地域との強い関わりの中で、義務教育9年間を通じた中学校経営方針等の様々な学校運営や教育課程に関する事項を共有・審議し、学校運営の改善や開かれた教育課程を推進した。また、小中一貫授業研究会や地区懇談会にも運営協議会委員は参加していたが、有意義な会となった。	B
ブロック内評価後の気付き	・今年度は、予定通り小中一貫授業研究会を6月は中川中学校で、1月は南山田小学校で互いの授業参観を実施し、授業改善について議論したり、9年間を通してよりよい教科指導について話し合ったりすることができた。また、児童生徒交流会では、中学校から生徒会が作成した中学校の1日の学校生活や行事について動画にまとめ、各小学校へ配付したり、2月に小学6年生が中学校へ行き、授業参観したりして中1ギャップの解消や円滑な小中学校の連結に生かすことができた。		
学校関係者評価	各学校の自己評価総括が甘くなく、しっかりと振り返り、謙虚に評価していることが次年度につながる。しかしながら、自己評価結果については、何が課題となったのか、また不十分だったことは何か等の具体性を明確にし、次年度にその積み残しを改善していくようにしてほしい。地域人として、受け身ではなく、自分たちが学校にできることを見つけて、取り組んでいきたい。		

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①生徒に身に付けさせたい力を指導者が明確にもち、授業では目標や評価規準、学習課題を生徒に分かりやすく提示するとともに、確実な力が身に付く授業展開を工夫して、主体的・対話的で深い学びを実現する。②教育DXの研究を進め、GIGA端末やAI型教材等の活用による教育効果を実証的に高める。	①生徒に身に付けさせたい力を指導者が明確にもち、授業では目標や評価規準、学習課題を生徒に分かりやすく提示するとともに、確実な力が身に付く授業展開を工夫して、主体的・対話的で深い学びを実現する。②教育DXの研究を進め、GIGA端末やAI型教材等の活用による教育効果を実証的に高める。	
豊かな心	①道徳年間計画に基づき、各学年で特別な教科・道徳の授業研究を進めるとともに、別業を活用して教育活動全体で生徒に豊かな心を育む。②「Pay Forward」の考えを柱として日々の実践に結び付け、学校の内外に根付かせ、広げていく。	①道徳年間計画に基づき、各学年で特別な教科・道徳の授業研究を進めるとともに、別業を活用して教育活動全体で生徒に豊かな心を育む。②「Pay Forward」の考えを柱として日々の実践に結び付け、学校の内外に根付かせ、広げていく。	
健やかな体	①身体計測・新体力テストの実践を通して自分の体や体力について知り、自らの健康の保持増進や体力の向上につなげる。②心身の健康の保持増進のために教育活動全体を通じて学習できるよう教科や特別活動との連携を図る。	①身体計測・新体力テストの実践を通して自分の体や体力について知り、自らの健康の保持増進や体力の向上につなげる。②心身の健康の保持増進のために教育活動全体を通じて学習できるよう教科や特別活動との連携を図る。	
特別活動	①「Pay Forward」と「Greeting Day」の二本柱を中心に、生徒どうしの継続的な活動を通して、一人ひとりの自主性を育成する。②生徒会本部と各委員会の連携を活性化させ、共同で取り組む活動の充実を図る。	①「Pay Forward」と「Greeting Day」の二本柱を中心に、生徒どうしの継続的な活動を通して、一人ひとりの自主性を育成する。②生徒会本部と各委員会の連携を活性化させ、共同で取り組む活動の充実を図る。	
いじめへの対応	①引き続き、いじめ防止対策委員会で情報を共有し、記録を取り、進捗を管理する。保護者との共通理解や外部機関との連携を積極的に活用する。②いじめ防止や危機管理の研修を実施し、教職員の知識理解や対応力を高める。	①引き続き、いじめ防止対策委員会で情報を共有し、記録を取り、進捗を管理する。保護者との共通理解や外部機関との連携を積極的に活用する。②いじめ防止や危機管理の研修を実施し、教職員の知識理解や対応力を高める。	
人材育成・組織運営(働き方)	①授業の研究・改善・指導と評価の一体化を中心に据えつつ、メンター研修及び教育活動、学校運営に関わる様々な実践を幅広く活用して、すべての職員が目標をもって力を伸ばす。②会議の時間短縮等にくわえ、国や市の施策を踏まえた教育課程、日課表の在り方を追究する。	①授業の研究・改善・指導と評価の一体化を中心に据えつつ、メンター研修及び教育活動、学校運営に関わる様々な実践を幅広く活用して、すべての職員が目標をもって力を伸ばす。②会議の時間短縮等にくわえ、国や市の施策を踏まえた教育課程、日課表の在り方を追究する。	
児童生徒指導	①教育相談のアンケートなどを活用し、相談活動の充実を図る。②Y-Pアセスメントの実施時期を工夫し、生徒の実態や変容を捉えられるようにする。③生徒指導の研修を実施し、教職員の資質が高められるよう、計画、運営を行う。	①教育相談のアンケートなどを活用し、相談活動の充実を図る。②Y-Pアセスメントの実施時期を工夫し、生徒の実態や変容を捉えられるようにする。③生徒指導の研修を実施し、教職員の資質が高められるよう、計画、運営を行う。	
特別支援教育	①個別支援学級と特別支援教室、一般級の状況を常に把握・共有し、効果的に生徒の支援を行う。②個々のニーズに対応できるよう、特支Coが中心となって、組織的な支援体制を確立する。③支援体制の充実を図るため、教職員の研修を実施する。	①個別支援学級と特別支援教室、一般級の状況を常に把握・共有し、効果的に生徒の支援を行う。②個々のニーズに対応できるよう、特支Coが中心となって、組織的な支援体制を確立する。③支援体制の充実を図るため、教職員の研修を実施する。	
地域連携	①引き続き、学校だよりの配布や学校ホームページを通して、学校の様子を伝え、地域の理解と信頼を深めていく。②社会情勢をふまえつつ、生徒が地域社会の一員として主体的に活躍できる場を建設的に調整する。	①引き続き、学校だよりの配布や学校ホームページを通して、学校の様子を伝え、地域の理解と信頼を深めていく。②社会情勢をふまえつつ、生徒が地域社会の一員として主体的に活躍できる場を建設的に調整する。	
学校運営協議会	①小中ブロックで運営協議会を持つことで、広く地域とのかわりを持ち地域連携の充実を図る。②キャリア教育のまとめとして3学年の卒業期に行う「自分を語ろう」で委員が助言者として立ち会う。③地域学校協働本部とともに活動することで、地域人材の発掘を行う。	①小中ブロックで運営協議会を持つことで、広く地域とのかわりを持ち地域連携の充実を図る。②キャリア教育のまとめとして3学年の卒業期に行う「自分を語ろう」で委員が助言者として立ち会う。③地域学校協働本部とともに活動することで、地域人材の発掘を行う。	
ブロック内評価後の気付き	・今年度は、予定通り小中一貫授業研究会を6月は中川中学校で、1月は南山田小学校で互いの授業参観を実施し、授業改善について議論したり、9年間を通してよりよい教科指導について話し合ったりすることができた。また、児童生徒交流会では、中学校から生徒会が作成した中学校の1日の学校生活や行事について動画にまとめ、各小学校へ配付したり、2月に小学6年生が中学校へ行き、授業参観したりして中1ギャップの解消や円滑な小中学校の連結に生かすことができた。		
学校関係者評価	各学校の自己評価総括が甘くなく、しっかりと振り返り、謙虚に評価していることが次年度につながる。しかしながら、自己評価結果については、何が課題となったのか、また不十分だったことは何か等の具体性を明確にし、次年度にその積み残しを改善していくようにしてほしい。地域人として、受け身ではなく、自分たちが学校にできることを見つけて、取り組んでいきたい。		

中期取組目標振り返り	・教育課程全体で小中と連携し育成を目指す資質・能力を確認し、9年間を通じた生徒の自己有用感を高める指導につながる環境を整えた。・コロナ禍が徐々に回復し各行事を行うことができた。3学期制の良さが出た。また、児童会との交流もでき、生徒会活動方針の一つ「Pay Forward」を小中でも推し進めることができた。同時にCDを制作し考え方や方向性を伝えた。・生徒指導面だけでなく特別支援的アプローチも整い、個に応じた指導体制づくりが安定した。サポート教室利用のルールも確立され、「登校・学習支援」の場として大切なシステムとなっている。
------------	---

中期取組目標振り返り	・A評価:校内授業研究期間が従来の1週間から1か月間となり、教科担当者間の相互評価、管理職の視察による指導・助言が充実した。年間を通してグリーン・ティン・デイ(あいさつ活動)の取組をはじめ、人権教育としたりした教育活動を目に見る形で行えた。保健指導、命の授業、いじめ防止・対応については、各学年で計画、継続的に取り組むことで社会情動・非認知能力の涵養に手ごたえを感じた。 ・B評価:特に、特別支援教育は、支援教室実践推進校1年目として、環境整備が進み、ICT活用を含め、次年度にさらに多様な受け入れ体制を整えていく。また、地域連携や学校運営協議会など、地域の教育資源を活かした教育課程の実施を進展させていく。
------------	---

中期取組目標振り返り	
------------	--